

キャンパス・ハラスメント の 実態と対策の問題点

キャンパス・ハラスメントと差別に反対する横断ネットワーク

Equal on Campus Japan

2023年6月11日

小久見祥恵 ・ 山下栞

ネットワークについて

- 構成員：
問題意識を共有する、所属大学・専門・立場の異なる個人(学部生・院生・卒業生・ポ
スドク・若手教員(留学生・元留学生含む))および団体。
(※ハラスメントを専門に研究をしているわけではない。)
 - ハラスメントの発生、制度的に由来する二次加害の発生：各大学に共通
⇒各大学において、各個人/団体が別々に改善を訴えても、届きにくい現状
 - 加害者教員が他大に異動し、元所属大学が対応しなくなる。
異動先大学で情報が共有されずに問題が繰り返される
⇒局所的な対応だけでは不十分
- ⇒仕方なしに、ネットワークの結成へ

横断ネットワーク提案の経緯

キャンパスセクハラ問題に対し複数の団体・個人が各自で取り組んでいる

「特定の誰かがやっている」という感じを出さないで動く必要

中心なし
管理者なし
超党派
広い連絡・協働ネットワーク

- ・対外的に団結してセクハラ対策を求める **一大勢力に見せない**と、政治も大学もなかなか動かない。
- ・点在して動いていると声が小さく見えて勿体ない。
- ・経験知等を共有し、協力し合う一つのプラットフォームは欲しい。
- ・団体間の繋がりを広げることで、二団体間の繋がり以上の **人脈構築や連絡コストの削減**が見込める。

- ・どこかの団体が中心になったら連携しにくい。特に被害者が不安で入りにくい。
- ・一つの団体が管理するのは負担。

- ・キャンパスセクハラを実効的に根絶したい **有志すべてが合意できるミニマムを基本線**に繋がる。
- ・合意しない部分は個人・自分の所属団体の名で動く。
- ・各団体の個性があるので、**ローカルでの活動を尊重し、互いの活動の効果を最大化**しつつ、声を合わせるのだけは超党派で。
- ・利権があると見られないよう、寄付・クラファンは実施しない。
※但し、署名活動の交通費は今後カンパで補てん予定

活動内容:署名手交まで

- 実効的なキャンパス・ハラスメント対策を学会・大学・文科省・国に求める要望文 [Equal on Campus](#)

- ◆国は、海外の法律を参考にしながら、実態調査や専門家の意見聴取を経て、日本の大学の実態に沿った法律を早急に作ること。
- ◆文部科学省は、ハラスメントの実態を調査し、予防・解消に実効的な対策を提案し、規模の大小問わず全国の大学が実施できるように、統一基準を設けて大学の意思決定機関に働きかけること。
- ◆大学は、これ以上多くの被害者を出さないためにも、法律・文科省指針を待たず、制度的改善を進めること。
- ◆学会は、院生や研究者が大学と学会に二重に所属し活動をする実態を前提に、学会ごとにハラスメント禁止・対応規定を制定し、予防・啓発に努め、被害発生時に適切な対応を行うこと。

- 署名
24,665 人(2023年6月4日16時時点)



活動内容:署名手交まで

● 活動の流れ

- 2022年8月24日 横断ネットワークを結成
- 2022年11月20日 要望文を公開
- 2023年1月27日 change.orgにて署名活動・[Twitter](https://twitter.com)アカウント運用開始
- 2023年3月10日 参議院文教科学委員会における伊藤孝恵議員の質疑
キャンパス・ハラスメントが取り上げられた
- 2023年3月27日 文部科学省にて署名手交・記者会見
いくつかのメディアにて報道→
- 2023年5月 各大学宛に要望文を送付(レスポンス待ち)

メディア報道

★ハフポストで、Equal on Campusの文科省宛署名提出の記事が出ました。



「ハラスメント被害で大学に安心できる場所がない」文科省に実態調査求め、学生らが署名2万3千筆提出

「個々の大学はハラスメント問題に適切に対処していない可能性が高いにもかかわらず、大学の管轄組織である文科省の対策は極めて手薄」（署名を提出した学生）

★朝日新聞でEqual on Campusの署名提出に関する記事が出ました。



キャンパス・ハラスメント 学生らの回体、国に「実効性ある対策を」：朝日新聞デジタル

大学での様々なハラスメントについて、国や大学は実効性のある対策を。大学生や若手の大学教員らで作るグループが27日、文部科学省に対し、実態調査を行うことなどを求める署名や要望書を提出した。このグ...



アカハラ厳正対処も被害把握はまだ 文科省の対策調査

★産経新聞でEqual on Campusの活動が取り上げられました。



大学のハラスメント調査を 学生らが文科省に要望書 | 共同通信

大学内で起きるセクハラやバグハラなどの「キャンパス・ハラスメント」の根絶を目指す大学生や若手教員による...

★共同通信で、Equal on Campusの文科省宛署名提出が報道されました。

各紙報道

活動を通して見えてきた問題点、課題

- 専門的知識(法制度)が欠けているがゆえの限界
→問題として、専門外の学生・若手が、非効率的に活動せざる得ない状況
[課題] 専門家への不信がありつつ、どう連携するか
- 大学内部の仕組み、国・文科省と大学の関係について、知り得ない立場(学生、若手)であることの限界
[課題] アウトサイダーとしての学生と、運営インサイダーとしての教員の理解の乖離
- 苦しんだ人たちの多くは、退場させられ、沈黙させられている。
[課題] 大学教員が(あえて?) 気づこうとしない。
大学人による「被害を知らなかった」「聞いたことがなかった」の暴力性、免責、想像力の欠如。
- 世代間連携の難しさ: 年配大学教員の無理解
「なぜ大学教員自身のためにもなること、仕事を学生が無償でしているのに、協力しないどころか抑圧するのか？」
→ 学生運動への偏見の名残、ムラ社会の同調圧力
[課題] 社会活動に対するジェンダー分析の必要

活動を通して見えてきた問題点および課題

- 周囲の学生・若手にできることは限られている。

活動する上で、希望のなさ(成し遂げても最低限必要な環境に対して働きかけたという結果を獲得するだけ)、
時間的・経済的余裕のなさを感じる

被害を聞くことで二次受傷になる、どれだけ酷い話を聞いても、できないことがないためフラストレーションが募る
→「最も権限・責任がない人間が、最もつらい仕事を押し付けられている」という不当さ

[課題] **専門職の雇用を早期に実現**し、学生にカウンセラー役や制度不備のツケがこないようにする。

[課題] 平等な人格として尊重され、尊厳を保障されること(要望文記載)。

- 伝わりにくさ:記者などに対して

ネタとしての消費、「個別事件→告発」というステレオ

→制度的問題だからこそ記者に背景知識がないと通じにくい(告発というフォーマットから抜け出すことの難しさ)

今後(がないこと)について

- ・5月に大学宛に要望文を発送し、レスポンス待ち
- ・今後は漸次的クローズを予定。
- ・[課題]は今後、関係機関・関係者が積極的に改善すべきもの。
- ・今後このような活動が必要にならないよう、制度が整うことが理想。